

福島・南A遺跡



- | | | |
|---|---------------|---|
| 1 | 所在地 | 福島県郡山市蒲倉町字南 |
| 2 | 調査期間 | 一九九二年(平4)六月～一九九三年一〇月 |
| 3 | 発掘機関 | 郡山市教育委員会・助郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 |
| 4 | 調査担当者 | 押山雄三・佐藤重幸・高橋博志 |
| 5 | 遺跡の種類 | 館跡か |
| 6 | 遺跡の年代 | 一五世紀～一六世紀 |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 南A遺跡は、郡山東部ニュータウンの造成工事に伴い調査が実施されたもので、JR郡山駅から東へ4km離れた阿武隈山地の西端に位置する。遺跡は、頂上面の細い低丘陵の南東向き斜面から低地に至る部分を占有しており、同じ丘陵上には同時期の小山C遺跡(屋敷跡)・古館遺跡(城館跡)があり、谷を |

(郡山)

はさんだ南側の丘陵上に一辺5mの方形壇二基からなる南C遺跡が位置している。これらの遺跡も造成地内にあり、南A遺跡とあわせて調査を行なっている。なお、南A遺跡は、工事用道路で掘削された崖面の観察により新たに発見された遺跡で、遺跡中心部の約三割が調査前に破壊されていた。

検出した遺構としては、一辺三四m×七八mほどを長方形に区画した築研ないし箱状の堀、雑壇状の段切り整地面、建物及び柱穴群、建物に伴う廻炉裏、井戸、土坑などがある。出土遺物としては、カラケ・陶器・磁器・漆器・鉛玉・石臼・鉄釘・笄・土壁・木簡・馬の頭骨などがある。遺物は、整理用コンテナに二七箱分出土しているが、そのほとんどは焼失した土壁であり、容器類はいたって少ない。

遺跡の構成は、南面及び東面の中央部に土橋状の虎口をもつ長方形の区画堀と、区画内の中央部から東側に設けられた段切り整地面とこれに伴う建物群、その西側に群在する一三基の地下式土坑プロック、区画外の東側から検出された二棟の建物からなる。遺跡の中心となる雑壇状の段切り整地面は四段あり、最上段に主殿と考えている廂付きの二間×三間の南北棟建物二棟が並存している。主殿には新旧の二時期があり、古期に焼失した厚さ10cm余の土壁が出土している。主殿に廻炉裏施設はなく、二段目以下の建物には基本的には廻炉裏が伴う。また、下段に降りるにしたがい建物の建て替えが

多く、柱穴の規模も小さくなり、主殿とそれ以下の区画に大きな違いが認められる。群在する地下式土坑は上から三段目の整地面にあり、建物群と隣接している。地下式土坑の中には、開口時の一次推積土の認められるものや坑内に柱穴をもつものがあるため墓地とは考えられず、貯蔵庫的な性格を考えている。

遺跡のある蒲倉地区は、伊勢・熊野の先達職をもつ大祥院が存在した地で、一六世紀中葉からの『大祥院文書』が伝えられている。南A遺跡周辺は地元で先達屋敷の通称で呼ばれており、遺跡が大祥院跡かそれに関係する館跡である可能性が高い。しかし、出土品に修驗に関するものがないなど疑問も残る。南A・古館・小南C遺跡の報告書は、平成七年度に刊行する予定であり、今後は周辺遺跡との関係を踏まえ遺跡の性格を考えていきたい。

8 木簡の釁文・内容

(1) 「急□□□□□」

164×20×5 011

(2) 「大日如来」

170×10×1 011

南A遺跡の木簡には、呪符(1)と笛塔婆(2)の二種類があり、ともに遺跡を区画する堀から出土した。

呪符は東虎口の南側から五枚重ねで、頭部を堀底の側壁面に突き刺した状態で出土した。完存するもの三点、頭部のみの残欠一点、

頭部を欠損するもの一点で、最長のもので長さ100mm、幅15mm、厚さ1mmを測る。うち二点に墨痕が認められ、釁読できた一点のみ掲げる。

笛塔婆は一〇〇枚前後あり、南虎口の西側から束ねた状態で出土した。長さ一四〇～一七〇mm、幅10mm、厚さ1mm前後のほぼ同規格の絆木の表面に墨書されており、全体の九割ほどが釁読できる。釁文は一点のみ掲げた。他のものも全て同文である。

9 関係文献

（財）郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団『郡山埋文ニュース』六四・六七・六九・七四・七七（一九九二、九三年）（押山雄三・佐藤重幸）

